經濟論叢 毎月一日發行
第四十九卷第三號 昭和十四年十一月一日發行
大正四年六月二十一日 第三種郵便物認可

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十九卷 第五號

昭和十四年十一月

論叢

勢力抽象の勞銀論……文學博士 高田保馬

世界經濟の本質……經濟學博士 柴田敬

時論

支那の匯劃制度……十亀盛次

統制の進展と組合制度……經濟學博士 蜷川虎三

研究

東洋に於ける資本主義精神の缺如……經濟學士 島恭彥

不完全競爭と外國貿易……經濟學士 岡倉伯士

說苑

貨幣と金……經濟學士 中谷實

リカアドウ貨幣理論の解釋に就いて……經濟學士 有井治

附錄

彙報

外國雜誌論題

（禁轉載）

第四十九卷　七八四　第五號　一二〇

リカアドウ貨幣理論の解釋に就いて

有井治

一

普通に知られてゐる如く、リカアドウは一般價値論に就いては、スミスを承繼して費用勞働生産費説を徹底せしめた。ところが貨幣の價値理論に於いては、一方に貨幣の價値は之を構成する素材を生産するに必要な勞働量に依つて定まるとなし、他方貨幣の流通數量に依つて決定されるといひ、彼は明らかに矛盾に陷つてゐる、[1]といふ解釋がある。

此點に關し、リカアドウは數量説の適用を、不換紙幣と國家が發行權を獨占する貶質貨幣とのみに限定し、完全な金屬貨幣や兌換紙幣に迄は及ぼさなかつた[2]とされ、またリカアドウは、金銀の生産が各人の任意に委ねられる自由制度の下に於いては、貨幣の價値は他の商品の價値と同じく、その素材を生産するに必要な勞

16) a. a. O. S. 173-5.

1) Laughlin, J. L., The Principles of Money, 1903, p. 240; Diehl, K., Soziafl wissenschaftliche Erläuterungen zu Ricardos Grundsätzen der Volkswirtschat- und Besteuerung, 1905, II. Bd., S. 224; Wagemann, E., Allgemeine Geldlehre, 1923, S. 135.

働量に從つて定まるが、金銀の生産が國家の獨占に屬し、又は統制に服する場合には、發行卽ち供給と需要とに依つて決定される、と考へた[3]と說明される。

併し此事はリカアドウが明言するところではない。從つて斯る解釋は、リカアドウの勞働價値說から出發して、獨特の勞働價値說を樹立せるマルクスが、『流通する金の數量は商品の價格に依存するのであるが、流通する紙幣の價値は、全くそれ自身の數量に依つて定まる』[4]といふのであるから、むしろマルクスに對して妥當するものと思ふ。而もマルクス自身は銀行主義(Banking Principle)者である、曰く

『流通速度が前提さるれば、流通手段の數量は單純に商品の價格に依つて定まる。從つて價格が高く或は低いのは、通貨の數量が多く或は少いからではなくて、むしろ通貨の數量の多く或は少いのは、價格が高く或は低いからである。これは最も重要な經濟法則の一つであつて、リカアドウ以後の英國經濟學の唯一の效績は、恐らくは物價史に依つて、この證明を詳細にした事であらう。』[5]

然らばリカアドウは矛盾に陷つてゐるのであらうか、私は昭和四年三月に次の如き解釋を施した。

要するにリカアドウは其の勞働費用價値論より出發して、硬貨の生産費を與へられたる一定のものとなし、素材價値に基づく貨幣の價値を論じた。然るに貨幣數量說を採用し、貨幣の價値が其の數量によつて定まるとなすに及んで、其の立論と背馳するに至り、特に紙幣の價値を論ずるに際しては、生産費の何たるやに苦しみ、鑄造料なる特別の生産費を案出するの止むを得ざる事となつた。而も前述の如くその論述は寧ろ最初の出發點たる實體價値を離れ、職能價値に卽する名目學派の態樣を呈するに至つたのである。故に『通貨は全部低幣から、而もそれが代用する筈の金と均しい價値を有する紙幣から成立つ場合に、最も完全なる狀態にある』のである。

以上私は……リカアドウの貨幣理論を示し、彼の貨幣論に於ける一般的立論或は終局的な結論は、地金主義よりは寧ろ名目主義を採り、殊に貨幣國定學說に近きものとなつてゐることを明にし得たと信ずる。[6]

翌昭和五年一月、橋爪教授が『成立の過程は如何樣にもあれ、彼が一度成立した數量說を、不換紙幣や品質劣惡なる鑄貨に對すると同じく、一般の金屬貨幣や兌換(紙幣)にも妥當せしめたことは、疑ふ餘地が存しない』[7]と云はれたのに力を得て、私は昭和七年十一月

2) Wagner, A., Die Geld- und Kredittheorie der Peelschen Bankakte, 1862, S. 62.
3) Gonnard, R., Histoires des doctorines monétaires, IIe T., 1936, p. 295.
4) Marx, K., Kritik der politischen Oekonomie, herausg. v. K. Kautsky, 1924, S. 114.
5) Marx, a. a. O., S. 97.

には次の如くに書いた。

……彼に於いては、素材價値に基づく價値の尺度としての貨幣なる思想と、職能價値に基づく交換手段又は支拂手段としての貨幣なる思想とが、觀念的に區別されてゐる……就中、前の思想は主として硬貨の價値論に表はれ、後の思想は紙幣價値論に現はれてゐるが、遂には後の思想を以つて、金紙の通貨全體を一貫せしむるところに、リカアドウ特有の數量說が樹立されてゐる。[8]

私にとつて極めて有益な興味ある論文が、最近增井教授によつて發表された。それは『リカルドオ貨幣理論の一考察』と題し、坂西由藏博士還曆祝賀論集『經濟學經濟史の諸問題』の中に收錄されてある。教授の結論は『ゆえにリカルドオの貨幣本質觀は貨幣商品學說であり、その貨幣價値觀は職能價値說である』[9]といふところにあると思ふ。

教授がリカアドウの貨幣價値觀は職能價値說であるとされる點は全く同感であるが、彼の貨幣本質觀が貨幣商品學說であるとすれば、リカアドウの貨幣に關する本質觀と價値觀とは、如何に結合され妥當せしめられてゐるのであらうか。兩者は『矛盾』或は『遊離』せないであらうか。

私は貨幣商品說を以つて、最も根本的な貨幣現象は貨幣の價値現象なりと觀る所から、貨幣構成の實體的素材に其の本質を求めむとする貨幣學說をいひ、貨幣構成の素材が概ね永く金屬たりし關係から、貨幣商品說は事實上貨幣の價値論に於ける金屬學派(Metalisten)に一致する[10]と解する。若し私の此の貨幣商品學說の理解に誤なしとし、また既に述べたるが如く、リカアドウの貨幣論に於ける一般的立論或は終極的な結論が、地金主義よりは寧ろ名目主義を採り、殊に貨幣國定學說に近きものとなつてゐる、といふ私の解釋に誤なしとすれば、彼の貨幣本質觀が貨幣商品說で、その貨幣價値論が職能價値說である、と解することは明らかに矛盾するのである。

固より私が貨幣の本質といふのは、貨幣をして貨幣たらしめてゐるもの、換言すれば夫れなくして貨幣た

6) 拙稿、通貨主義とリカードの貨幣論、經濟論叢28卷3號、132—133頁。
7) 橋爪明男、貨幣論、278頁。同說、Rist, Ch., Histoires des doctorines relative au crédit et à la monnaie, 1938, p. 125-134.; 反對、Angell, J. W., The Theory of International Prices, 1926, p. 59-60.
8) 拙稿、英國正統學派の貨幣數量說、神戸高商「研究と資料」第二號6頁。

り得ない性質、高田博士の云はれる『貨幣性』[11]であつて、かゝる本質を具備する『物それ自體』(Ding an sich)を指稱するのではない。[12]從つてリカアドウの貨幣本質觀が貨幣商品說であるといふことは、彼の考へる本質が、或る商品に具現されてゐるといふ意味ではない。或る商品その物が貨幣たるのではなく、或る商品をして貨幣たらしめる性質が、貨幣の本質であると考へる。ところが教授は『しかしリカルドオは決して抽象的なる貨幣職能そのものを貨幣と見たのではない。彼はこの職能を荷なふ具體的なる流通手段(商品)を貨幣と考へてゐる』[13]と云はれる。然らばリカアドウの貨幣の本質の解釋と、私の解するところが齟齬することの爲に、私の疑問が發生するのであらうか。併しリカアドウが貨幣の本質の意味を、如何に解釋してゐたかは知る由もない。とすれば、教授のリカアドウが貨幣の本質と解釋したと解せられるところと、私の解するところとが、合致せぬ爲に疑問が生ずるのであらうか。

進みて云へば、教授も記されたやうに『もとよりリカルドオにおいては、今日われ〳〵が考へるやうな一個の統一ある貨幣學說の體系は覗ひ得ないのではあるが、……一應は、價値尺度および交換媒介の二つを認めてゐるものゝやうである。しかし、この二つの貨幣職能のうち、はたしていづれを重要視したかは容易に判定すべき的確なる言葉を見ないのであるが、恐らくは、ある時は價値尺度貨幣を問題とし、また他の時は交換媒介貨幣を問題としたのであらう。』[14]

しかし教授の詳細なる引用によつて、『價値尺度たる貨幣が重視せられてゐると一應解すべきである』[14]が、『しかし嚴密にいへば、この場合といへども、貨幣は決して完全なる意味において價値尺度たる職能を果してゐる譯ではない』[14]ことが明らかである。『されば リカルドオにおいて、貨幣の職能の一つとして、たとへ「價値尺度」なる言葉が使はれてゐるとしても、それはむしろ便宜のための用語に過ぎない……』[15]しかのみならず彼は『貨幣に對して價値尺度たる職能を明かに拒否してゐるのである。』[16]『しかるに、リカルドオは他面

9) 增井光藏、前揭論文、前揭書、333頁。
10) 拙稿、貨幣の本質を論ず、研究と資料、四號3頁參照。
11) 高田保馬、經濟學36-37頁、經濟學新講第三卷46-47頁、經濟原論133頁參照。
12) 拙稿、貨幣の本質を論ず、研究と資料、四號1--2頁參照。
13) 前揭書、333頁。　14) 前揭書、317頁。　15) 前揭書、318頁。

において……明らかに交換媒介手段たる貨幣が問題とせられてゐると解すべきであらう。[17]』故に教授は『リカルドオの貨幣本質觀は貨幣商品學說であり、その貨幣價値觀は職能價値說である。そして氏が重視した貨幣職能は交換媒介物としてのそれである[18]』と結論される。然らば果して、リカアドウの貨幣本質觀が商品說である、と解して差支ないであらうか。寧ろ彼が價値論に於いて職能說を採る如く、本質論に於いても職能說的見解を持したといひ得ないであらうか。殊に彼の爲替理論の根本的立場が、大體に於いて購買力平價說と見て支障なし、とする考へ方[19]からすれば此感が尙更に深い。私が『彼の貨幣論に於ける一般的立論或は終局的な結論は、地金主義よりは寧ろ名目主義を採り、殊に貨幣國定學說に近きものとなつてゐる』といふのは、リカアドウの本質論並びに價値論が、一般的終局的には共に貨幣職能說である、とする理解に基づく。

三

尙ほ貨幣數量說と生產費說又は需要供給說との、併用又は矛盾に就いてミルは、リカアドウ以後に於ける所謂『通貨主義 (Currency Principle) と銀行主義 (Banking Principle) との論爭』に基づいて、頗る愼重に取扱ひ『貨幣も亦一の商品であるから、その價値は一般商品の價値と同じく、一時的には需要と供給とによつて、しかし窮極的かつ平均的には生產費によつて、決定せられる[20]』となし、一應の解決を與へてゐる樣であるが[21]、詳細に之を吟味するならば、猶ほ完全な解決を與へたとはいひ得ない。曰く

『他の商品の價値が、その生產費の變動と合致するには、その條件として供給に實際の變動あることを必要とせず、唯だ潛在的な變動があれば足りる。しかも實際に變動のあつた場合でも、その變動した價値が需要を變化し、かくて此の價値變動の原因としてではなく結果として、供給の增加又は減少を必要とする場合の外は、唯だ一時の變動に過ぎない。此事は又裝飾品・贅澤品として見たる金銀に就いても正しいが、しかし貨幣に就いては眞理ではない。……故に、貴金屬の生產費の變動は、恰も貨幣の數量に增加又は減少のあつた場合に於いて、貨幣の價値に影響するだけである。然るに此事は、その他の如何なる商品に就いてもいひ得ない。[22]』

16) 前揭書、318—319頁。　17) 前揭書、319頁。　18) 前揭書、333頁。
19) 拙稿、リカアドウの爲替論と購買力平價說、經濟論叢46卷2號參照。
20) Mill, J. S., Principles of Political Economy, Ashley's ed. p. 488, *cf.* p. 499.
21) 橋爪、前揭書、283頁；拙稿、英國正統學派の貨幣數量說、研究と資料、二號40頁脚註；等參照。　22) Mill, op. cit. p. 504.

右の如くミルに於ける貴金屬の生産費は重要なものであるが、間接的な要因に過ぎず、唯だ貨幣數量の增減を通じてのみ、貨幣の價値に影響するものたるに止まる。然らば何故に貨幣に就いては、生産費の變動が貨幣數量の變動を通じてのみ作用するかと問へば、貨幣に對する需要は無限であるといふ以外に、解答が得られない。かゝる說明が我々の論理的要求を、十分に滿足せしめるものとなし得ないことはいふ迄もないであらう。

同樣の併用と矛盾は、多分にミルの影響の下に立つケムメラーに於いて、更に明らかである。しかも彼自身は數量說の主張者である。

『この（貨幣數量）說の總べての信奉者が主張するやうに、貨幣に對する需要は、その供給と同じく、物價決定の一原因たることは正に眞實である。

『それ故に金の價値は、時に其の商品的用途に基づき、時に其の貨幣的用途に基づく。

『貶質貨幣は不換紙幣と同樣に獨占價格の熟知されてゐる原理に關する一場合を示す。需要が增大してゐる時に供給を制限するならば、その價格を騰貴せしめ得るであらう。そして價格の騰貴は需要の增加に比例するであらう。』[24]

かゝる併用と矛盾から、始めて完全に離脫したのはフィッシャーであらう。[25] これ彼の所謂『修正せられたる貨幣數量說』(Reconstructed Quantity Theory of Money) たる所以であり、また現代に於いて、數量說が彼の名に於いて知られてゐる所以でもあると思ふ。

23) Mill, op. cit. p. 490.
24) Kemmerer, E. W., Money and Credit Instrument in their Relation to General Prices, 1907, p. 30–31, 44, 35. *cf.* p. 54, 55.
25) Fisher, I., The Purchasing Power of Money, 1911, new & rev. ed. 1926 Chap. VIII. §7, 8. 參照。